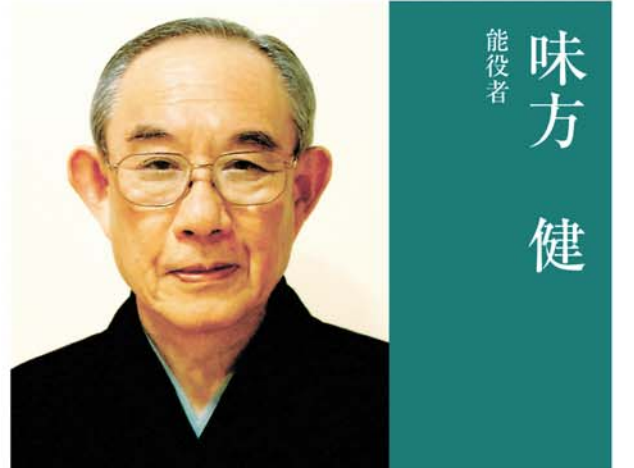


「言霊の幸はふ国」多くの日本人が 血の通った言葉を忘れた

日本人は20世紀に多くの忘れものをした。落しものひとつも。取り返しのつかぬことになる。そして、忘れものをした本人たちがそれに気が付いていない。事は悲惨である。

まず、多くの日本人が血の通った言葉を忘れた。もともと、この世紀末的な世にあって、文字言語・音声言語は必需のものと、日常、使用される



能役者 味方 健

感じさせる玄妙な力がある。日本人は、いや、世界の機械的文明国の人々かもしれないが、日常、やりとりする言葉の中に、そういう世界を取り戻すべきである。つまり、シグナルの機能に堕した言葉に、シンボルとしての世界を取り戻せ、というのである。

些細なことと言われるかもしれないが、テレビやラジオで、昨今、鼻濁音が失われている。昔は、NHKなどが、キ、グ、ケ、ゴと表記して教えたものだ。発音の数、言葉の数、文字の数の減少する時代とは、貧困時代である。文化が疲弊し、精神の凋落する時代である。

日本人の使う言葉が瘦せた一大原因は、高開発国特有の機械文明の発達、ことに電脳機器の高精度化が襲う以前に、GHQによって強いられた漢字制限、字形の簡略化、仮名遣いの改革がある。字形的にも、音韻学的にも、理の通らない漢字字形の簡略化、語法的に理の立たない仮名遣い、格助詞は、を、へ、のみに旧を残して、あえて「現代かなづかい」と称したが、「現代かなづかい」は仮名遣いではない。仮名遣いという以上、orthography(正字法)でなくてはならない。「現代か



●みかた・けん 1932年、京都市生まれ。能役者、観世流シテ方。重要無形文化財(能楽)保持者。博士(文学)。観世寿夫記念法政大学能楽賞、京都市文化芸術協会賞、京都府文化賞功労賞を受賞。京都市文化功労者。能の舞台に意欲的に取り組む一方、研究者と演技者を結ぶパイプ作りに努力し続ける。著書に「能の理念と作品」、共著に「能・狂言辞典」など。

寺と門前町で参詣者を手厚く歓迎 忘れたくない信仰通じた人々の絆

清水寺は昨年、記念すべき年を迎えておりました。先師大西良慶和尚の三十三回忌の年忌に当たり、その法要が勤められたことが一つ。良慶和尚が奈良興福寺から清水寺に晋山して開講された盂蘭盆法話が百年、つまり百回を迎えたことが一つ。盂蘭盆法話は今日、各寺院で夏に晴天講座として開講されている法話会の草分けとなったのです。いま一つは、和上が晋山してすぐ



清水寺貫主 森 清範

古い日記です。1694(元禄7)年から1864(文久4)年まで170年間、220冊あり、京都市指定文化財となっています。貴重な日記を翻刻しようと作業を進めてきたのですが、昨年4月、記念の年に花を添えて第一巻が出たのです。

成就院というのは、清水寺の本願職を担う僧坊で、江戸時代は幕府の絶大な後ろ盾を得て、寺の財政や寺領の管理、門前町の治政を担当していましたので、日記には門前町や境内のあらゆる出来事が記録されています。

「清水の舞台から飛び降りる」

物品の品定めをすることもできない。考えてみれば、「辻説法」なるものがすでに死語になっているのですから、無理もない話です。お葬式に出ても、お坊さんの方の説経の音がなかなか大音声が聞き取れない。あれでは、亡くなった方々の魂は冥界をさ迷うだけではありませんか。

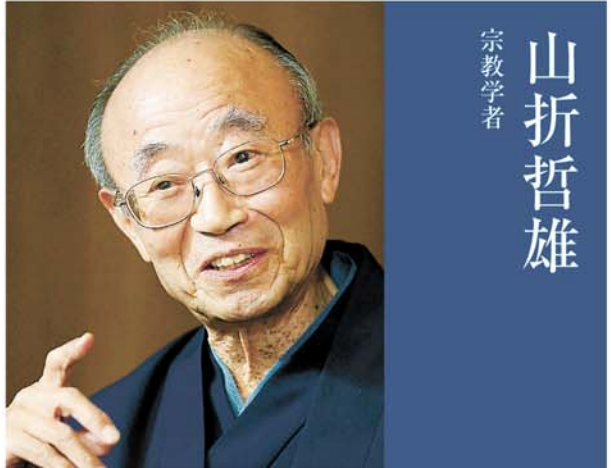
同じことが、今日流行の漫才の世界なんかにいえるのではないのでしょうか。あの早口でまくし立てるやりとりの中で、私などは半分聞き取ることができないままです。あれはただ、話の中身をこまかくするための窮余の一策



●もり・せいはん 1940年、京都市生まれ。15歳で清水寺貫主大西良慶のもとで度、入寺。花園大卒業後、真福寺住職などを歴任。88年、清水寺貫主・北法相宗管長に就任。現在、全国清水寺ネットワーク会代表、文人連盟会長。著書に「見える命 見えぬいのち」「このころの幸」など多数。

「奇」が当たり前のように存在する 別の価値軸を認める懐の深さ

奇人を遊ばせておく文化、変人を抱擁する文化が、かつて京都にはあった。子どもの頃に聞いたので、下鴨だったか古門前だったか、町名は定かではないのだが、「〇〇の奇人」という言い方をよく耳にした。変人ではあるのだが、奇人と呼ぶときにはどこか、常人には測りがたい破格の人という響きが



宗教学者 山折 哲雄

答弁や質疑の棒読みは、おなじみの光景です。そこはかつて大音声が獅子吼の大舞台だったはずですが、その晴れ姿も今日ではほとんど見ることができません。それどころか、野次や怒号の飛び交う馴れ合いの乱闘場と化しているありさまではありませんか。

街頭でも、車の中からマイクを通してな、大音声がしきりに、獅子吼らしきものは聞こえてくる。けれど、街頭に両足で立つて発せられる肉声の大音声が獅子吼に接することはもうほとんどなくなりました。肉声が聞こえてこないから、こちらの肉眼でその人

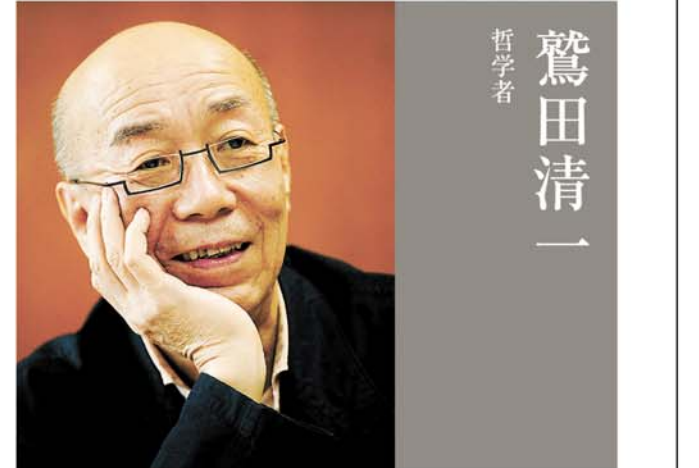
ではないかと邪推したくもありません。落語の高座からも同じような風が吹いてくるようになりまし。名人、次期名人と呼び声の高い人の語りも聞いていても、そのあまりの早口にもついてはいけなことがありません。おそらく時間が制限されているためなのでしょう。いきおい語りのリズムが崩れ、語りそのものが意味不明の音声に変質してしまっているのです。

肺臓をつらぬく大音声が聞きたい。大地を震撼させる獅子吼が聞きたい。



●やまおり・てつお 1931年、米国生まれ。岩手県出身。東北大学文学部研究科博士課程修了。「宗教と現代社会」を終生のテーマとし、幅広いジャンルにわたる作品を発表。国立歴史民俗博物館教授、国際日本文化研究センター所長などを歴任。専攻は宗教学・思想史。「覚悟の精神史」と和辻哲郎文化賞を受賞。著書に「近代日本人の宗教意識」など多数。

奇人を遊ばせておく文化、変人を抱擁する文化が、かつて京都にはあった。子どもの頃に聞いたので、下鴨だったか古門前だったか、町名は定かではないのだが、「〇〇の奇人」という言い方をよく耳にした。変人ではあるのだが、奇人と呼ぶときにはどこか、常人には測りがたい破格の人という響きが



哲学者 鷺田 清一

のを現すため」という。柳がこれを「茶道論集」の中で書いてのことからもうかがわれるように、身近なところで破形を愛でてきたのはお茶人たちである。歪な「器」と「数奇」の設えにである。そういえば昨年、琳派四〇〇年を記念するイベントが続いたが、鷹峯の本阿弥光悦もまた「数奇」の人であった。ちなみに、これに「奇」と書くようになったのは、「数奇の運命」といわれるように、漢語の「数奇」が「不倖」を意味するからだといわれる。

「奇」は「元からあるもの」である。

完全なものはずで「割り切れていない」、余韻も暗示もない。つまりは「自由」が、「ゆとり」(最近では「糊代」)にひたかけて「伸びしろ」などもいわれる)がない。しかし「奇」として「不完全を狙う」のもまた不自由ではない。だから、「奇」において重要なのは、「偶」か「奇」かにかかわらぬ、そのような「無碍」の境地だということになる。そこにおいてはじめて「足らざるに足るを知る」ことも成り立つ。

奇人が「奇」であるのは、日々の生業に没頭、というか埋没している人たちが思いもしないところに価値の軸を



●わしだ・きよかず 1949年、京都市生まれ。京都市立総合文化センター研究科博士課程修了。関西大学教授、大阪大学教授、同総長、大谷大教授を経て、現職。せんだいメディアテーク館長。専攻は哲学。サントリー学芸賞、桑原武夫学芸賞、読売文学賞。主著に「「聴く」ことの意味」「モードの迷宮」「哲学の使い方」「しんがりの思想」など。